

「空所」概念と読みの交流

上越教育大学教職大学院 松本 修

問題の所在

松本修(2010)¹⁾は、山元隆春(2005)²⁾、桃原千英子(2008,2009)³⁾を踏まえて、読みの交流を促すための〈問い〉が必要とする要件の検討を行った。金子みすずの「私と小鳥と鈴と」の授業実践において学習者が案出した〈問い〉等の検討を通じて、理論的に導き出された「読みの交流を促す〈問い〉を基礎づける5つの要件」が、読みの交流のための〈問い〉の有効性の検討に実際にたえられるものであるかを分析し、一定の効力を持つものであることを確認した。その5つの要件は以下のようなものである。

- a 表層への着目
：テキストの表層的特徴に着目する「問い」であること
- b 部分テキストへの着目
：部分テキストが指定されていることによって、読みのリソースの共有がなされていること
- c 一貫性方略の共有
：部分テキストが他の部分テキストや全体構造との関係の中で説明されるという解釈の一貫性方略(結束性方略)が共有されていること
- d 読みの多様性の保障
：読み手によって解釈が異なるという読みの多様性に関われていること
- e テキストの本質への着目
：想定される作者との対話を可能にするようなテキストの勘所にかかわるものであること

そこでの理論的検討は、もともと松本が検討してきた「語り」にかかわる〈問い〉、とりわけ描出表現にかかわる〈問い〉が、その性格上本来満たしている要件 a, b, c, d と、ヴァイポンドとハントの言う要点駆動の読みのために必要な要件 a, c, e とを組み合わせると5つの要件になるというものであった。⁴⁾ b, e の要件は、一人の読み手が読むことそのものにとっては不可欠ではないが、学習としての読みの交流にあっては、満たされていた方が実際の交流に結びつくからだ。学習の過程としての読みの交流は、テキスト、読み手、他の読み手とのコミュニケーションとして成立するから、少なくとも読みの契機、話し合いの契機としての〈問い〉には5つの要点が必要だということになる。

ところで、桃原(2010)は、山元(2004)の議論を踏まえてイーターの「空所」概念に着目し、学習者の交流の分析をする中で、「テキストの空所が、読みを交流する中で「要点駆動の読み(対話的読み)」を引き起こさせた」というような指摘をしている。⁵⁾

桃原は入れ子構造を持つ小説「ブラジルおじいの酒」(目取真俊)を教材にして、その構造に対応した学習者の読みの交流を引き出している。入れ子構造を持つテキストは、すなわち時間的な語りの重層性をも包含しており、そこでの学習課題も描出表現にかかわる学習課題を含んでいる。桃原は、松本(2010)の論に依拠しつつ、ふたつの学習課題について5つの要件の検討をであらかじめ行っている。描出表現にかかわる学習課題は5つの要件を満たしているとし、しかし、もう一つの学習課題が必ずしも満たしていないとしている。この学習課題も学習者によっては対話的な読みをもたらしているのだが、そのような読みを引き起こすには、「空所」というテキスト側の特性が絡んでいる、というのである。別の言い方をすれば、学習者が空所をテキストに見いだすことによって、対話的な読みが可能になったわけである。〈問い〉の要件とイーザーの「空所」の間の理論的なつながりを前提していると考えべきであろう。

ここではその問題意識に導かれて、あらためてイーザーの「空所」概念と読みの交流の関係を捉え直し、なぜ空所がテキストの本質への着目を促すのか、すなわちヴァイポンドとハント(1984)にもどれば、なぜ空所が交流方略⁷⁾に対応した読みを促すのか、その意味を考察したい。

1 イーザーの「空所」概念と交流

W・イーザーは、テキストに対する読者反応を中心にすえた読書行為論を構築し、その理論は1982年の邦訳出版以降、日本の文学教育論に大きな影響を与えた。その読書行為論は、読書という行為に作用する主としてテキスト側の契機を明らかにするものであったが、あらためその中心概念、「空所」及び「否定」について見ておきたい。

イーザーの「空所」と「否定」の定義は次のようなものである。⁸⁾

テキストはそうのようにさまざまな組合せからなる一システムであるからには、組合せを具体化するための場もシステム内に用意されているのが当然と考えられる。その場が空所であって、特定の省略の形をとってテキスト内の飛び地(enclave)を作り出し、読者による占有をまつ。この空所の特色は、空所を作り出しているシステムそのものによっては充填されえず、他のシステムによる補填しかありえぬ点にある。そして補填がなされるとともに、構成活動が始まり、この空所という飛び地がテキストと読者の相互作用を推進する基本的な転換要素の働きを示す。従って、空所は読者の想像活動をひき起こすが、その活動はテキストの示す条件に従うように求められる。ところが、テキストには空所のほかに、相互作用を起こさせるための別の場もある。それはさまざまな程度の否定の可能性であって、テキストにおける特定の打消しに起因する。空所と否定は、それぞれ別個にコミュニケーション過程の展開を左右するが、読者を誘導する目的では協同効果をもつ。ところで、空所はテキストにおけるさまざまな叙述の遠近法の間関係を空白のままにしておき、読者がそこに釣り合いを作り出すことでテキストに入り込むようにする働きをもつ。すなわち、空所は、読者がテキスト内部での均衡活動を行う糸口となる。それに対して否定可能箇所は、読者に既知のことあるいは確定的な事柄を思い起こさせ、しかもそれを打ち消すようにする働きをもつ。打ち消されたといっても、

それは視界に残り、読者は既知あるいは確定していることに対する態度を修正するように仕向けられる。すなわち、否定によって、読者はテキストに対して一定の位置をとることになる。以上のように、空所および否定を通じて、テキストと読者の不均衡に起因する読者の側の構成活動は、特定の構造をもつことになり、この構造が相互作用の過程全体を支配する。

テキストには本来書かれてしかるべきことがらの中に、書かれていないことがあり、その間を読者が想像力を働かせて埋めつなぎ、一貫した意味を作り出さなければならない。そうした働きをするテキストの要因・箇所を空所という。しかし、読者がそのようにして紡ぎ出す一貫した意味を否定するような要素がテキストにはあり、そのような働きを否定という。読者は空所を埋めて一貫した意味を紡ぎながら、自らの考えを否定するテキストの作用によって、自らの読みにおける意味の体制の更新を行う。というようなことが言われている。

山元（2005）は次のように端的に解説を施している。”

すなわち、読者が〈空所〉によって自らの想像力を働かせる場をテキスト内部に見いだし、〈否定可能箇所〉に出会うことによって、読者は〈既知のあるいは確定していることに対する態度〉を〈修正〉するように促され、そのことによって読みが立ち上がったものになるとイーザーは言うのである。

イーザーの言う空所とは、読者のテキストへの働きかけを誘うテキストのシステムティックな機能を意味している。また、否定は、空所を埋めるにあたって、読者の主体的で新しい意味を創り出すことを促す。イーザーは次のように述べている。”¹⁰

つまり空所の機能は二重の性質を帯びている。読書のシンタグマ軸では、セグメント間の結合の必要性を示し、他方、パラディグマ軸では、否定された規範と読者のテキストに対する態度との関係を問いかける。この二重の構造は分かつことができず、ともにテキストと読者との相互作用の条件となっている。空所は意味の空白形式として、虚構テキストならではの経験を読者に与える。すなわち、空所は読者の想像力に働きかけて、テキストが与えるか、あるいは読者に喚起させた知識を再生に導く。この空所の働きで、否定がそなえている生産的な力がある。つまり、古い意味は、否定されながらも、新たな意味がそこに重ね合わされることによって、再び読者の意識にとらえられる。この新しい意味は空白のままであるが、古い意味が否定され、解釈のための素材に転換されるがゆえに、古い意味を必要とする。すなわち新たな意味は、否定によって主題化された空所を確定するところからえられることになる。

空所を埋めることは、言葉のつながりの文脈の上ではつながらないものをつなぐという行為であるが、一方、その埋め方の可能性は、否定の機能によって、新しい認識を生み出す形で選択されることになるわけである。

このように見てくると、空所は、書かれてあるべき事が書かれていない（説明されてい

ない) ことがらを埋めるように読み手に促しつつ、新たな認識を生み出すものであることがわかる。これはまさに、テキストの読み手の交流 (transaction) を促すものであり、テキストの本質に読み手をかかわらせる要素であると言える。

2 否定の二重の機能

ところで、イーザーは、否定には二重の機能があるとしている。¹¹

ところで否定は、選択された規範の中にだけ空所を生み出すのではなく、読者の立場にも空所を作り出す。すなわち、慣習化している規範の有効性が否定されると、読者は自分では当然と思っていた既存の世界に対して新たな関係に立たされる。この関係は、過去が否定されたという意味では確定的であり、現在が未知のものであるという点では不確定である。この未知の現在を確かなものにする、すなわち、空所を補填するには、読者はテキストを真に自己の経験となしうる態度をとらざるをえない。

第一の否定は、これまで気にも留められることのなかった潜在的な主題——否定行為の原因はここにあるのだが——をとり上げる。従って、そこではもっぱらテキスト外の世界の規範がとり上げられ、その有意性が主題となる。それに対して第二の否定では、読書中に作り出される意味形態を、読者の慣習にフィードバックさせる力をもつ。

山元はこの二つの否定について、「〈第一の否定〉はテキストに指示され仕掛けられた〈否定〉であり、〈第二の否定〉は読者のものの見方に向かう〈否定〉である。」¹²と述べ、とりわけ第二の否定の重要性を強調している。深川明子 (1990) は、これを「学習者の認識を否定する空所の機能」と呼んでいる。¹³

深川の論は、「注文の多い料理店」と「やまなし」を素材に、「否定」の理論に依拠した文学教材の読みの授業において、現在の急務である方法論研究の一試案として、分析批評理論の援用が有効であることについて述べた¹⁴ものである。山元と同様、第二の否定の機能に着目しており、それは読者による批評の生成である。イーザーの理論は、テキスト側の機能に焦点化したもので、極端な場合には作者側の議論に見えることもあるが、その理論の可能性は、むしろ読み手側の働きかけの契機としての「空所」「否定」にあったのであって、いわば読み手のテキストへのアプローチの理論的基盤を与えたところにある。山元・深川が同じように第二の否定に着目した理由はここにある。

そして、深川が方法論として分析批評を持ち出したことは、テキストの細部を分析的に読む方法論として分析批評が当座便利だったからに他ならず、それはある意味で要点駆動の読みにおける表層方略を満たすことでもある。表層方略を極端な場合「レトリックに着目する読み」ということもあるが、深川の論は、そのような要素を満たす方向性を持っていたわけである。

こうして、読みの交流の学習における「空所」概念の位置が明らかになった。それは、学習者にとってテキストへの働きかけの契機となるもので、しかも読み手自身の従来の認識を更新せざるをえないような新たな意味づけをテキストと世界に対して行うことにつな

がる批評的な読みへの契機となるものである。

3 「ブラジルおじいの酒」の授業における学習者の読み

桃原(2010b)は、「ブラジルおじいの酒」を教材として読みの交流の学習を行った授業を分析検討している。そこで桃原が着目していたのは、学習者の次のような記述である。¹⁵

僕は、発問1の答えを最初は、【区長が言った「精の抜けておるむん」(p19 013)の精は、アルコールの事ではなく、味やにおいの事で、上原はそれを本当の意味のアルコールと勘違いして、「水るやるむんな」(p20 03)といった。】としたのですが、この答を裏付ける確証がつかめず、結局考え方を変えるために、この答えを捨ててみることにしました。そうしてみると、他に全くまともな答えが見つからず、結局なにもこれといったものが思いつかぬまま、グループでの話し合いに臨みました。そこでは、今まで思いつけそうで思いつけなかった、【その酒が特別な酒だったから】という答えで全員一致で、その理由も、《蝶は人の魂がこの世で舞う姿(p10 04-5)なので、その蝶が飲む特別な酒の味に、区長達は気づけなかった。》と、『ああ、確かに』と思える内容ばかりでした。しかし、この作文を書きながらよくよく考えてみると、この答えに対し、一つの疑問が浮かびました。「魂であれど元は人なのに、なぜ魂にならないと分からないような味があるのか。」です。そこで思い付いたのが、【酒に入っていたのは精ではなく今までの思い】という説です。これなら青年たちが酒を水に思えたのも分かりますし、魂になった時に邪念などが全て洗われるのなら、酒に詰まった切実な想いに集まるのも分かる気がします。なので、私は最終的にこの答えで決定しました。

次に、発問2の答えですが、これについては、【作者(未来の僕)の言葉】だと考えました。その理由としては、《僕の心情が入っているので、僕以外の人ではなく、また、「美しかった」と強く印象に残る部分は過去形に、おじいと話しをしているところは現在形になっているので、現在形や過去形にと自由に変換可能な記憶の中だと、また、それを物語りにできる作者(未来の僕)だと》思いました。その後、グループでの話し合いをしましたが、皆今度も全員一致で、【少年の僕の言葉】のような答えでした。が、その答えの理由が、《僕が感じた心情が入っているから》のような感じで、私の答えの理由の一部と同じでした。ということは、私の答えはこのグループ皆の答えをさらに発展させたようなものなので、当然得るものも少なく、結果ほとんど最初と変わらない、【未来(大人の)の僕の言葉】で決定しました。

そして、最後の最後、作者が読者(私も含めて)に言いたかったことですが、こればかりは今はどう考えてみても分かりません。なので、とりあえず、この話に頻繁に出てくる、「蝶」と、「酒」についてから考えてみる事にしました。

まず、「蝶」ですが、蝶は発問1の答えや、本文のp10 04-5で人の魂としているので、蝶=人の魂としていいと思います。

次に、この話の主題に最も関係のありそうな「酒」、特におじいの酒についてですが、これも発問1の答えより、「邪念のない魂たちが集まってくるような、おじいの想いの詰まった特別な酒」なので、これは文字どおり、おじいにとっては特別な酒です。そして、その想いの詰まった酒に、集まった蝶たち(おじいやおじいの父、母、兄弟、そして、その他の戦死者など?)のように、その酒の本当の味を感じる。「精の抜けておるむん」と言った区長や、「水るやるむんな」と言っ

た上原のように、表面の味を気にするんじゃなく、もっと中身を味わおうとする。それが、今の社会に抜けているところではないのか、つまり、このことこそが、作者が言いたかった事【主題】なんじゃないかと私は思います。(下線は桃原)

話し合い課題とした発問は、以下の2つである。

発問① 青年たちにはお酒が水に思えたのはどうしてだと思うか。

発問② 末尾の2文「羽の色は美しかった。見上げる夏の空の青い底に、まだこの世界に訪れない無数のちょうが舞っているような気がした。」は、語り手の言葉か、少年の僕の言葉か。

発問と話し合いを契機にどのように読みを展開したかが良くわかる、中学校1年生としてはすぐれたレポートである。桃原は次のように分析している。

発問①では、「答えが見つからないまま、グループでの話し合いに臨んだ」Rであったが、班の話し合いから「一つの疑問」を抱く。これは、発問①が文学作品の「空所」に関わる問題であったことを意味し、「酒に入っていたのは精ではなく今までの思い」という答えを導き、根拠を挙げながら作品に一貫性を持たせた読みを行っている。Rは、友達との話し合いの中で、「空所」を乗り越えることができたと言えよう。そして「一つの疑問」という言葉には、与えられた発問①「青年たちにはなぜお酒が水に思えたのか」の矛盾や飛躍を超えて、「魂であれど元は人なのに、なぜ魂にならないと分からないような味があるのか。」という、テキストへの新たな疑問と価値づけが学習者R自身によって行われたことが読み取れる。

ここで言われている「価値づけ」とは、山元(2004)がヴァイポイントとハントの「欠落した輪郭」を「空所」に近い概念としていることに導かれたもので、物語の語り手との意味の共有がなされたという評価をしているものである。これは、テキストと読者との交流の成立を認めたものである。だから桃原は「テキストの「空所」が、読みを交流する中で「要点駆動の読み(対話的読み)」を引き起こさせたのだ。つまり、学習者Rは、発問①に欠けていた、問いの要件e「テキストの本質への着目」を自ら補ったと言えよう。」としているが、そもそも発問①に要件eが欠けていたかどうかは疑問である。

「甕の中の酒があるものにとっては美酒であり、あるものにとっては「精の抜け」た水に過ぎない」というのは読み手の積極的な働きかけを待つ空所であり、しかも常識では説明できない否定としての機能を持っている。

むしろ、そこには、空所が空所として機能するために読み手側が必要な状況を満たしているのかという問題があるように思われる。

読者論でしばしば「内包される読者」のような理想的な読者が措定されるのは、いかにテキストに働きかける契機があっても、読み手が働きかけなければ意味がないということ

がある。読み手＝学習者の成長に価値をおく文学教育にあつては、山元・深川のように第2の否定の機能に着目し、読み手の変容、成長の契機として空所・否定を把握するのが自然である。その意味では、学習者は、自らが最初捉えきれなかった契機を改めて捉えなおし、空所を空所として機能させたのだと考えるべきではないだろうか。桃原もイーザーの論に依拠しながら、次のよう述べている。

空所は、テキストにおける読み手の働きかけの契機となる部分であることから、テキストの「空所」において要点駆動の読みが行われるのはいわば当然の事といえる。逆の視点で見れば、発問①にも要点駆動の読みを促す要素が含まれており、一貫性方略の共有でテキストの「空所」を補うことにより、発問①に要点駆動の読みが生じたと言える。また学習の実態から、発問②が作品の一貫性を満たし、発問①の要点駆動を引き出す契機となったと考えられる。

4 読み手相互の交流の意味

桃原の分析にも「学習の実態から」として含まれていることであるが、イーザーやヴァイポンドとハントラの議論に欠けている点、すなわち他の読み手との交流が空所を空所として機能させたと見ることができる。レポートには、グループの話し合いの内容については、自分の考えを直接発展させるものではなかったように書かれているが、なぜレポートを書く段階で改めて考え直すことができたかという、その一つの要因は他者の読みに触れたことである可能性はある。発問1に対するこの学習者の最初の意味づけは、テキストの一部の言葉をつなぐことで当面の合理性を確保するものであったが、交流を経たあとでは具体的な根拠を手に入れ、さらにテキスト全体の意味にかかわる新たな意味に向かっている。第2の否定の機能が認められるのである。これは他者の読みに触れることで、自らの読みを見直さざるをえないという他者との交流の意味である。

このように空所が空所として機能するためには、他者の読みとの具体的な交流が意味を持っているのである。

5 2つの問いのかかわりの意味

桃原は、「作者が読者に言いたかったこと」を書かせている。そこで先ほどの学習者は、主として発問1の答えに即して説明を試みている。

表面の味を気にするんじゃなく、もっと中身を味わおうとする。それが、今の社会に抜けているところではないのか、つまり、このことこそが、作者が言いたかった事【主題】なんじゃないかと私は思います。

ここには、発問2について、最後の語りを「未来の僕」と捉えているこの学習者の読みが反映されている。物語の現在からは未来に存在する僕が語り手であるとすれば、その未

来が「今の社会」であり、そこに対するメッセージがあると読んでいるわけである。それが発問1についての読みと結びつき、このような主題が読み手に像をむすんだと考えられる。つまり、交流方略にかかわる読みの実現は、一つの問いで必ずしも満たされるわけではなく、時には複数の問いのかかわりによって満たされる可能性があるということが示されている。^{*16}

6 まとめ

山元は次のように述べている。^{*17}

「要点駆動」は状況をそのように作り出さなければ生まれないスタンスである。すなわち、「要点駆動」に状況がアフォードするように、場を作り替えていく必要があるのだ。その場の形成が文学の読みを「対話的」にする。

この考え方は、ここで検討してきたことに一貫した意味を与えてくれる。すなわち、

- ① 空所は、書かれてあるべき事が書かれていない（説明されていない）ことがらを埋めるように読み手に促す「働きかけの契機」である。
- ② 空所を埋める際には、読み手は、否定の機能によって読み手自身の従来の認識を更新せざるをえないような新たな意味づけを行う。
- ③ 学習にあっては、空所の機能が賦活されるような問いが必要である。
- ④ 問いそのもので準備できない状況を、他者との交流活動および複数の問いのかかわりによって補うことができる。

読みの交流を促す「問い」として、5つの要件を満たすような「問い」は、特に「テキストの本質への着目」＝交流方略にかかわって、原理的に「空所」を顕在化させる役割を持っている。しかし、「空所」が顕在化したからと言って、必ず読みの交流が達成されるとは限らない。要点駆動に状況がアフォードするように場を作り替えるのは「問い」だけではなく、他者との交流の場があることと、複数の問いがかかわることなども、そのような場の作り替えにかかわっていく。イーザーの概念を徹底して読み手の側から捉え直すことが、読みの交流の学習を成立させるための前提であるということになる。

注

*1 松本修（2010）「読みの交流を促す「問い」の条件」『臨床教科教育学会誌』第10巻第1号 臨床教科教育学会 2010.5 pp.75-82

*2 山元隆春（2005）『文学教育基礎論の構築』溪水社

*3 桃原千英子（2008）「読みの交流のための前提的条件－「少年の日の思い出」の読み

を通して—』『臨床教科教育学会誌』第8巻第2号 pp.40-41

桃原千英子 (2009) 「読みの交流による『走れメロス』の授業実践」『第116回全国大学国語教育学会秋田大会発表当日資料』なお、この研究は以下に論文化された。

桃原千英子 (2010) 「読みの交流による『走れメロス』の授業実践」『臨床教科教育学会誌』第10巻第1号 臨床教科教育学会 2010.5 pp.57-66

*4 Vipond, Douglas & Hunt, Russell A. (1984) "Point-Driven Understanding: Pragmatic and Cognitive Dimensions of Literary Reading ", *Poetics*, 13

*5 桃原千英子 (2010b) 「入れ子構造を持つ文学作品の読解」『国語科教育研究 第118回全国大学国語教育学会東京大会発表資料集』2010.5 全国大学国語教育学会 pp.49-52

及び当日資料 (この研究は Groupe Bricolage 紀要 No.28 2010.12 に論文化して掲載予定。)

*6 山元隆春 (2004) 「文学の読みが「対話的」となる条件—"point-driven reading"概念の検討を手がかりとして—」『国語科教育研究 第106回全国大学国語教育学会千葉大会発表資料集』2004.5 全国大学国語教育学会 pp.49-52 及び当日資料

なお、ヴァイポンドとハントは、「要点駆動の読み」を「対話的 (diaialogic) 読み」と言い換えている。

*7 交流は transaction。要点駆動の読みを支える三つの方略①結束性方略、②表層方略、③交流方略の一つ。山元 (2004,2005) 参照。

なお、①の結束性方略は、〈問い〉の要件の c 一貫性方略の共有 に対応しており、②の表層方略は a 表層への着目 に対応しており、③の交流方略がそのまま d テキストの本質への着目 に対応する。

*8 ヴォルフガング・イーザー 轡田収 訳 (1982) 『行為としての読書—美的作用の理論—』(原著 1976) 岩波書店 pp.291-292

*9 山元 (2005) *ibid.* p.195

*10 ヴォルフガング・イーザー 轡田収 訳 (1982) *ibid.* p.371

*11 ヴォルフガング・イーザー 轡田収 訳 (1982) *ibid.* pp.371-372, p.379

*12 山元 (2005) *ibid.* p.197

*13 深川明子 (1990) 「「否定」の機能を生かした読みの理論—読者論からの考察—」『深井一郎教授退官記念論文集』深井一郎教授退官記念事業会 若草書房 p.126

*14 深川明子 (1990) *ibid.* p.130

*15 桃原千英子 (2010b) *ibid.* p.13 以下の引用もこれに続く pp.13~16 の記述から。

*16 松本修 (未発表) 「「つり橋わたれ」の学習デザイン—読みの交流の学習課題—」において、この問いの組み合わせの問題について検討している。

*17 山元 (2004) 当日資料 p.13